



@幸せな贈り物



乾杯!

送旧迎新の乾杯のあいさつ

送旧迎新ということばは「古いものを送って新しいものを迎える」という意味で、昔に役人の世界で旧官を送って新官を迎えるという意味の「送故迎新」に由来することばです。そして、忘年会という風習は日本の風習で「一年の労苦を忘れる」（忘年）という意味ですが、韓国では「年齢を忘れる」という意味で、年齢は若くても、その人の才能や人柄を見て人とつきあうことを「忘年之交」と言いました。日本では1,400年あまり前から忘年または年忘れと言い、師走大晦日に知り合いどうしが集まって、酒や踊りでお祭り騒ぎをする行事があり、これが忘年会の元になりました。そして、新年がやってきたら、間違いなく「謹賀新年」という文章が登場しますが、これは「謹んで新年おめでとうございます」という意味です。短くして「賀正」と言うこともあります。

この時期になれば、いろいろな集いが多くあり、新しいはじまりを確かめるようになります。そのような集いの中で、かならず行われるのが乾杯です。職場の集い、同窓会、仲間同士の集いだけでなく、家族の集いでも乾杯が交わされます。このごろは乾杯も洗練されきていて、いくつか流行している乾杯のあいさつを調べてみたのですが、昔からT・P・Oが合わなければならないと言われていました。なんの話なのかというと、時間（Time）、場所（Place）、状況（Occasion）にふさわしい乾杯のあいさつでなければならないという意味です。

一年をはじめる時なので、未来に対する夢と希望をこめた乾杯のことばは「はじまりは小さいが、のちに大きくなる」という意味のあいさつが大勢を占めます。そして「すばらしい明日のために」という乾杯のあいさつや、「一日に一回以上は良いことをして、10回以上大きい声で笑い、100字以上書いて、1,000字以上読み、1万歩以上歩こう」という素朴な決心を込めた乾杯のあいさつもあります。「国のために、家庭のために、自分のために」という意味のあいさつもあります。そうかと思えば、おもしろい乾杯のあいさつもあるのですが、「あなたと私の大事な出会いのために」というかわいい意味が含まれていたりもします。その中で最高の乾杯のあいさつとして選ばれたのが「堂々と生きよう。おもしろく生きよう。格好良く生きよう。そして負けてあげながら生きよう!」という意味が入った乾杯のあいさつですが「新年にはお金にひるまず、権威に臆せず、学閥に押されずに堂々と生きよう。落下傘と心は広げなければ効果がない。心をパツと開いて自ら励ましながらしっかりして生きよう」という意味がこもっているということです。

ここで一番重要なのは何でしょうか。人です。人が素晴らしければ、何を着ても、何を食べても、何をしても素晴らしく見えます。ですから、素晴らしく生きるなら、先に私が素晴らしい人になることが重要です。

すべての人間を最も素晴らしくする 幸せの原理

金持ちや貧しい人々でも、権力があっても、庶民でも、学者でも、年をとった田舎のおばあさんでも共通して通じる永遠な真理があります。

魚は水の中に生きていてこそいのちがあって、鳥は空を飛んでこそ自由になり、木は土地に根をおろしてこそ実を結ぶように、私たちの人間にも幸せに生きようになる明らかな創造の原理があるという事実です。

聖書は神様が創造された人間は、最も美しい人生であったと語っています。神様の荘厳な創造の働き、すべての被造物の中で最も美しい創造物はまさに「人間」でした。神様のかたちとして造られた人間は、神様の完ぺきな計画の中で、どの被造物よりも祝福された存在で、そして、この地に存在する他の被造物を治める存在として創造されました（創世記 1:26~28）。この地で産んで増えて満たして、神様を喜ばせる最高の価値ある存在として造られたのです。人を造られて神様は感嘆されました。神様のかたちとして造られたというのは、人間がすなわち神様に似た神様の最も大切な子どもとして造られたことを意味します。それにもかかわらず、今日の人間の姿は幸せで、美しいと話すにはあまりにも醜い姿をたくさん見せています。それが成功でも、出世でも、その後にかくされた人間の貪欲は、創造された人間の美しさとは距離が遠い混とんとむなしさ、それ自体であるだけです。

今日の人間の姿と関係なく、神様が私たちに望まれるのは本来の人間としての美しい人生です。この美しい人生は、単純な真理から始まります。魚が水の中に生きていてこそ、いのちがあって苦しくありません。鳥は空を飛んでこそ、自由に歌えます。木は土地に根をおろしてこそ、葉も茂り、花も咲き、実を結びます。これと同じように、神様の息を吹き込んで霊的な存在として造られた人間は、霊である神様とともにいるとき、幸せを味わうようになります。しかし、人間が神様を離れた瞬間、人間は根こそぎ抜かれた木のように枯れて干からびてしわくち

やになって、いくらもがいて熱心に生きてみても、なんの生きがいもなく、実もなくむなしだけです。鳥かごに閉じ込められた鳥のように自由もなく、何かに縛られて無気力の中で奴隷のように生きていきます。お金に縛られて人間関係に押しえられながら、心配と憂いと恐れの中で未来に対する希望もなく、なんとなく生きていきます。これらすべての問題は、神様を離れたときに生まれた問題ですから、ただ神様に会えば解決されます。その唯一の道がイエス・キリストであると聖書は証明しています。

人間の問題を解決して下さるために、この世に来られたイエス・キリストは、聖書に約束されたとおり、人間となってこの世に来られ、十字架で死んで三日後に復活され、神様を離れたすべての人間が神様に会うことができる唯一の道であるまことの預言者になってくださいました（ヨハネの福音書 14:6）。

十字架で私たちの罪の代わりに死なれたことによって、私たちのすべての罪を解決して、のろいと災いから解放して下さるまことの祭司になってくださいました（マルコの福音書 10:45）。イエス・キリストは、死の権威をうち破って復活され、今でも人間を困らせて地獄に引っ張っていくサタン（悪魔）のすべての権威を完全に打ちこわされたまことの王になってくださいました。それで、聖書はイエス様を「キリスト」だとおっしゃっているのです。人間が絶対に解決できない根本問題を完全に解決された方だということです。

このイエス様を私のキリストと信じて、私の心に受け入れれば、神様と永遠にともにいる神様の子どもとしての身分を得ようになり、世界が創造されたときに受けたすべての祝福と権威が回復します。十字架で死に勝って、復活してサタンの権威を打ち砕かれ、人間のすべての罪をあがなってくださったイエス・キリストが、私のたましいの主人になって下さるとき、人間は最も美しい人生を生きていくようになります。

**あなたは最も美しい人生を生きていく
大切な人です。**

はじまりですか、 くり返しですか？

一年を送る時になると多くの人々が新年に決意をした事に対してうまくいかなかったと惜しんだり、くり返す生活に心を痛める姿を見たりします。熱心に生きたら、すべてがみな解決しそうで、幸せになるように思うのですが、一年を振り返れば、必ずそうなるわけでもなかったと思えます。また、善良に正しく生きること、互いに信じて仕えあいながら生きること、夢に向かって挑戦しながら努力することなども、過ぎ去った人生に対する自負心になるよりは、残念な思いをする足跡に感じられる時も多いようです。そして、数多くの人々が幸せだと思って執着している快樂が怖いのは、墮落をもたらすためではなく、その欲望の終わりが無いからです。

人間の努力や挑戦が私たちの人生をくり返しのよう感じさせるのは、それで解決できない何かがあるからではないでしょうか。誠実、熱心、善良さ、奉仕、献身、挑戦、努力などが生きていくのに常識で基本であり、普遍的なことであるのは事実ですが、どうしても人生の究極的な解答や目標になることはできないようです。なぜなら、人生の不幸の根本問題を解決できないからです。それで、人生の3大根本問題が解決されないはじまりは、新しいはじまりではなく、新しいくり返しであるだけです。その根本問題解決のはじまり、それがまさに私の人生の永遠な新しいはじまりです。

聖書は人間自らが解決できない3つの問題は、神様を離れた原罪、それによって受けるしかないのろいと災いの問題、そして、目に見えない霊的な問題で人間を滅ぼすサタンの権威の下に捕えられた問題であると語っています。ですから、とても熱心に生きたのに、ある日迫ってくる苦しみと問題を防止することができないのです。この問題を解決するために神様は救いの道を開いてくださいました。そして、人間を救う救い主は次のような条件を持っていない限りなりません。

救い主は必ず人間のからだで来なければならず(ヨハネ 1:14) 罪がない方ではなければなりません(ヘブル 4:15)。アダムの子孫ではなくて、処女のからだから誕生をしなければならず、罪の代価で必ず死ななければなりません(創世記 2:17)。神様の息子だという証拠で復活(1コリント 15:3~5)して、サタンの権威をうち破ってキリストの職分を果たさなければなりません。その方がまさにイエス様だと聖書は明らかにしています。罪がないイエス様がこの世に來られて十字架で死んで復活されることによって、神様を離れた私たちが神様に会う道を開いてくださり、私たちが解決できない罪をみな赦してくださり、サタン(悪魔)の権威を完全に打ちくだいて勝利されることによって、私たちの救世主、救い主になられたのです。だれでもこのイエス様を自分の救い主と信じて受け入れれば、神様の子どもになってまことの人生の新しいはじまりになるのです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(コリント人への手紙第二 5:17)

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入れて来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子ども 毎日の祈り

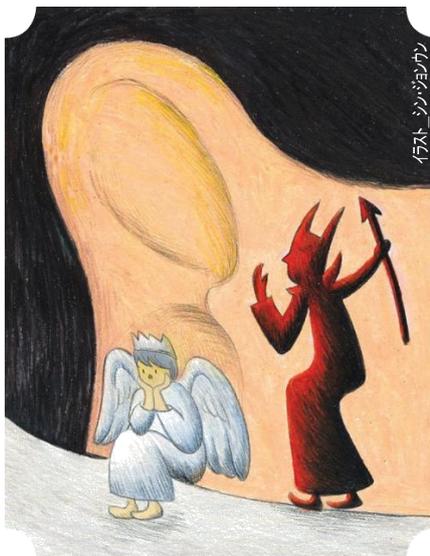
父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかさされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

聞きたいことは

世の中に声があまりにも多い。時代の変化がいろいろあるだろうが、そのうち韓国でも代表的なのが、スマートフォンの大衆化だ。

大人たちは持っているも用途が分からず、電話をかけて受けるのに過ぎないが、若者たちにはスマートフォンは、すべての最近情報の集合体として存在するので、まるで身体の一部と同じだ。それが彼らの目で耳だ。それで、電車であろうが道であろうが、どこでも彼らは耳にイヤホンを入れて、目は小さい画面に集中しているので、周囲を見回すことが鈍くなり、ときどき事故とつながったりもする。これは食事や対話時間にも同じで、相手の目を見るより、スマートフォンに集中して視線を離すことができなくて、しばらくスマートフォンと離れるようになれば、心が不安で恐ろしくなる禁断症状まで見られたりする。それでは、それで満足しているのかというと、まったくそうではない。瞬間的な選択で必要を満たそうとするせっかちな性質まで伴うので、インターネットの速い速度に比べて人間の性格は極度に疲弊していつている。したいことをして、聞きたいことを聞くのだが、飽き足りない彼らの手はいつも何かを探すのに忙しい。これは反対現象で、老人層の貧しい孤独として現れる。今、老人の人口の急激な増加が社会問題化されているのに、相対的に彼らは必要を満たされずにいる。

ある老人がとても孤独で話しかける人もないので、無料電話サービスがよい業者の案内電話をししばしば利用するという。周辺のすべての人々はあまりにも忙しいので、話しかけることも難しいだけでなく、何かに集中しているので、話かけたり聞くことが容易ではない。しかし、案内電話をかければ、ひ



とまずやさしい女の子のきれいな声を聞くようになる。8音階の狭さに該当する、はっきりした声が聞こえる「ようこそ!お客さま!ご用件をお聞かせください」その方に必要な用件は、電話をかければ聞こえる声で満たされるので、待つ間にもう一度聞こえる案内コメントに満足しながら受話器を下ろすという。

先端機器を持っていても味わうことができない青年たちの自由や、何も所有できない老人たちのくやししい不便さの中で、私たちが聞かなければならない声になにかを見定めるようになる。

人間には神様のみことばで伝えられるいのちの声と、失敗と苦しみの中へ案内する死の声がある。魚にエサで与える味がよいのは、魚を愛するから提供されているのではない。そのえさを通して得なければならない魚のからだを狙う漁師の実力である。人々は人生の価値を、やさしくて気楽で安らかなことに引っぱって行かれることに、あまりにもたくさん露出している。結局、良く行っているようだが、人生の獵師であるサタンに捕まって生きる広い道は、いのちの道ではない。まだ、すべきことがたくさん残っていて、なにか熱心になっている間、狭くて難しい道に聞こえる神様のみことばが聞きたくないならば、その人には不幸だ。

今も聞こえる祝福の声は「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます!」これは少しの間の案内コメントではなくて、とても忙しい手つきで聞けなくてもよい声ではなく、この地に生きている人は必ず聞かなければならない、いのちのみことばで、人生が最も聞きたいことばなのだ。

チョン・ヒョングク(福音コラムニスト)